

第三回 美術展覽會に就いて 文部省

黒田清輝

私は此處に展覽會出品の製作品に對して批評をするのではない。唯個人として私の感じた大體の心持と夫から序に批評といふ事に就て日常想つて居る處を一言申述べて見るだけの事である。

私の觀た處では第三回の展覽會は殆んど豫想通りの出來榮であつた。第一回には急遽の際斯うといふ方角も立たず、單に畫を収集したといふに過ぎなかつた。第二回の際は多少方角も定つたところから自ら面目も改つて、稍展覽會らしいものになつた。中には随分人目に觸れた作品も出來た。で、第三回になると以前の世評につられていくらか之に動かされた結果の表はれたものと、一方には第二回の随分變な奇を銜うた傾向のあるものは、比較的結果が面白くないことを證據立てられたのとで、今度の展覽會には少壯の作品に落着のある、眞面目のものが多く製作されたやうである。而して第三回の出來榮は前二回に較べて一般の進歩を示して居る事は無論である。

で、今年は先づ何人が見た所でも展覽會向といふ事を狙つて製作したものは、却つて出來であつたやうに思はれる。總て當て氣のある作品は面白くないが、併し製作者に取つては決して徒勞にはならない。斯ういふ人は來年は必らず自己の本領に立戻つて製作するであらうから、其の際には今年の無駄仕事の中に得たところを尠少ならず利用する事であらう。

次に批評家に就て一言して見たい。

近年、美術思想の發達は著しいもので、従つて批評家も續々輩出して來た。而して是等諸家の評論をきくにどういふものか無主義なでたらめな批評を下す向きもあるやうに見受けられる。尤も斯ういふ批評に限つて大抵××生だとか○△生だとか匿名でやつてある。又技術家の批評は、いはゞ素人よりもより多く偏頗に流れ易く詰り専門家には割合に考の狭い人がある事を往々發見する。正面から堂々と批判する批評家ならば、よし其言ふ處が一方に偏して居ても渠には一定した見解あり主義あるが故に聞いて心持がいゝ。而して近年少壯の批評家の中に面白い見解を有する人が大分出て來た。此等新進批評家の二三を申して見やうなら、木下杢太郎、河野桐谷、石井柏亭等の諸氏で、これ等の人はお互に随分議論をも戦はずやうだが、其意見の賛否は兎に角として、唯自己の見解を土臺として堂々と評論する處に大なる價值を見るのである。

『方寸』といふ雑誌は毎號寄贈されて居り、幾んど缺かさず讀んで見るが、此の雑誌の記者は確乎とした主義によつて忌憚なく縦横に批判するので面白味がある

私共は技術家であるから頭は無論一方に偏して居やう。また偏して居ればこそたまには變つた畫も出来るやうなものだ。従つて當然の結果として他人のものを評論するに當つても兎角自分の主義を主張するやうになる。

要するに技術家との縁故によつて毀譽褒貶する様な不真面目な眞似をせず、自己の確乎とした土臺を根據として、見たものを評論して行く批評家の出る事は非常に有益で又望ましい事である。

『文章世界』四十一 明治四十二年二月二十五日

第三回文展（明治四十二年一月二十五日～二月二十四日）をふまえての所感。